

〔平成二十九年年度研究会活動報告〕

モンゴル佛典研究会

研究会代表 阿部 真也

本研究会は、モンゴルの仏教について様々な角度から研究する事を目的としています。現在は、二十四年前から続いている『モンゴル仏教史』モンゴル語原本のローマ字転写、翻訳および訳注をおこなっています。この写本は、かつて橋本光實師によって訳された『蒙古喇嘛教史』（原文チベット語）のモンゴル語写本であり、その研究はまだ学界

において、さしたる成果は出ていません。これまでの研究会の成果は、「大正大学総合佛敎研究所年報」の第十八号（平成八年三月）、第十九号（平成九年三月）、第二十号（平成十年三月）、第二十一号（平成十一年三月）、第二十二号（平成十二年三月）、第二十三号（平成十三年三月）、第二十四号（平成十四年三月）、第二十五号（平成十五年三月）、第二十六号（平成十六年三月）、第二十七号（平成十七年三月）、第二十八号（平成十八年三月）、第二十九号（平成十九年三月）、第三十号（平成二十年三月）、第三十一号（平成二十一年三月）、第三十二号（平成二十二年三月）、第三十三号（平成二十三年三月）、第三十四号（平成二十四年三月）、第三十五号（平成二十五年三月）、第三十六号（平成二十六年三月）、第三十七

号（平成二十七年三月）、第三十八号（平成二十八年三月）、第三十九号（平成二十九年三月）に掲載されています。また、大正大学総合佛敎研究所の助成金によって、『モンゴル佛敎史』研究〔一〕（二〇〇二年六月、ノンブル社）、『モンゴル佛敎史』研究〔二〕（二〇〇六年五月、ノンブル社）、『モンゴル佛敎史』研究〔三〕（二〇一一年三月、ノンブル社）、『モンゴル佛敎史』研究〔四〕（二〇一五年三月、ノンブル社）の四冊を出版しました。では、本研究会の研究内容の一部について紹介します。

使用するテキストはモンゴル語の写本ですが、チベット語版は、ドイツ、日本、中国で三種出版されています。チベット語版からの翻訳としては、ドイツ語訳、日本語訳、モンゴル語訳、漢訳があります。それらを随時参照しつつ読んでいます。

モンゴル語版における問題点としては以下のものがあります。まず、外来語を表記するために作られたモンゴル語アリガリ文字やテクニカルタームを巡るものです。テクニカルタームのモンゴル語表記（あるいは訳）については、モンゴル語・チベット語アリガリ表記、サンスクリット還元アリガリ表記など様々な表記が見られます。その中にはある一定の傾向（あるいは法則）があり、それがこの文献の性格等を推測する手がかりになるものと思われま

た、人名等の音写語に異なる表記が非常に多くある、という問題もあります。次に、異なる写本の存在の可能性です。チベット語版、あるいは翻訳との比較により、一致しない記述が時折出て来ます。確認を必要とする所です。

本文献は政治史と仏教史の二部構成となっています。仏教文献としての特徴あるいは問題点については、これから明らかにしていく所ですが、何点か挙げておきたいと思えます。まず、チベットの仏教学者(サキャパンディタ)の格言、インドの龍樹の言葉、仏陀の言葉、諸経典からの引用がしばしばある事です。サキャパンディタの格言以外は出典が不明なものも多く、今後精査を行っていく必要があります。次に、仏教語の音写が、チベット語からとサンスクリット語からのもの二通りある点です。教理内容と合わせて検討の必要があります。

本年度の主な研究会の活動

- ・ 毎週火曜日・18時～20時位、研究会
- ・ 日本モンゴル学会に参加(春季、H29・5・20 東京外
国語大学。秋季、H29・11・18 滋賀県立大学)
- ・ 内モンゴル視察(H29・8月下旬)

今後の予定

- 毎週火曜日・18時～20時位、研究会
- 場所・大正大学史学閲覧室

頼瑠撰『真俗雜記問答鈔』訳注研究会

研究会代表 小宮 俊海

『真俗雜記問答鈔』は、新義真言教学の祖と称される中性院俊音房頼瑠僧正（一二二六～一三〇四）が、その時々記したものを集成した著作である。その内容は一千三百二十余条にのぼり、書名のごとく真言密教や仏教諸宗に関わる事項に止まらず、その内容は実に多彩である。一人の真言僧侶による教学的著作の域を超え、当時の宗教文化や社会状況までをも窺い知ることのできる貴重な資料といえる。

本書はすでに『真言宗全書』第三十七巻に活字化されているものの校訂テキストとして未だ不十分とされる。そこで本研究会は諸写本を聚集し、智積院新文庫蔵本を底本として校訂本文を作成し、条目ごとに【校勘】【訓読】【注釈】【解説】を施している。

今回報告するのは、新文庫蔵本全二十五冊のうち、整理番号・新文庫三十一―四（二五―二三）に相当する一冊の後半部分（十丁表～十八丁裏）である。本書を「巻第三」と定め、今回報告する後半部分を仮に「巻第三ノ二」とした。巻第三ノ二に収録される条目は次の通り。

○五十四 今論後得智所縁事。

○五十五 真宗生住等諸法常恒如是生事。

○五十六 五種開眼事。

○五十七 神讚事。

○五十八 姪事用行水事。

○五十九 悪人死骸不可置堂舎辺事。

○六十 不浄説法過事。

○六十一 釈論第四末那転中復次釈配三諦事。

○六十二 三論家悉有仏性事。

○六十三 華嚴涅槃不説識事。

○六十四 結集者事。

○六十五 仏性法身隱顕事。

○六十六 二教論法性身事。

○六十七 法華論三仏菩提事。

○六十八 四種釈事。

本年度は以上、十五の条目について各担当者を振り分け、研究会において本文校訂ならびに訳注研究を進めることができた。次年度以降引き続き訳注研究を進め、「巻四ノ一」を発表刊行予定である。

近世唱導文芸研究会

研究会代表 北林 茉莉代

本研究会は、大正大学図書館に所蔵される近世唱導関連文献の翻刻および研究を目的としている。当面の目標は、大正大学図書館蔵本『類雑集』を広く学界に紹介することにある。『類雑集』は近世に編纂されたと目される唱導資料であり、版本は「慶安四年^{卯辰}十月吉辰 石黒庄太夫板本」の奥書を持つものと、「明暦三^酉年三月吉辰寺町通圓福寺前町秋田屋平左衛門板行」の奥書を持つものの二種がある。どちらも、全十巻と総目録一冊の十一冊で、同じ版木で刷られていると考えられる。版本は、大正大学以外にも所蔵されているが、翻刻はなされていない状況にある。活字化されていない『類雑集』の翻刻作業は、非常に有意義であるといえる。

本研究会では、平成二十三年度から『大正大学綜合佛敎研究所年報』に一巻ずつ翻刻を報告してきた。また、翻刻作業と同時に、引用文献の調査ならびに校合を実施している。翻刻掲載時には、典拠名とともに、本文に異同がある場合は校異の結果を脚注に示した。また、資料の状態を忠実に再現するため、書き入力を指摘している。とくに、今年度掲載の巻八には、非常に多くの書き入れが認められた。そのため、書き入れの訓点をゴシック体で示し、受容の形

態がわかるよう工夫した。

さらに、昨年度からの伝本調査の一環として、今年度は石川県立歴史博物館に所蔵されている『類雑集』（巻七）の調査も実施した。この成果は、改めて報告したいと考えている。

今年度は、総勢十一人の会員を中心に研究会を運営し、巻八の翻刻および実地調査を行った。その結果、『綜合佛敎研究所年報』第四十号に『類雑集』巻八翻刻と出典考証を掲載することができた。

『類雑集』は国文学研究者において、以前より資料的価値が認められていたにもかかわらず、活字化されていないことにより、研究が進んでいない状況である。一刻も早く『類雑集』全巻翻刻を達成し、近世における唱導書のあり方について、研究展望が拓けるようにしていきたい。

『唐決』—日本における天台教学受容過程の研究—

研究会代表 寺本 亮晋

本研究会は、第三期目に入り、助走期間二年と二期六年に続いて「円澄疑問 広修決答」と「円澄疑問 維綱決答」の読解作業（訓読・現代語訳・注釈）を進めてきた。この「唐決」の両テキストは、円澄が日本より発する三十の疑問に対して、唐の天台山の広修とその弟子の禅林寺維綱がそれぞれ決答を示しているものである。円澄の発する同じ疑問に対して、両者の異なる答えを比較・検討することによって、疑問から見える当時の日本天台の教学的水準を探り、また唐からの決答の水準も推し量ることができる。そして、初期日本天台がそれらの決答をどのように受容したかを研究し、以降の中古天台を初めとする論義や口決にどのような影響を与えたかを探る基礎となる研究である。ただし、初期日本天台、延いては日本仏教の全体に関わる論点を含む第一級資料として認められているにも関わらず、体系的な研究が不足している。そこで、本研究会の作業の目的は、研究会独自のテキスト作成であり、他の「唐決」テキストの研究のたたき台となる基礎的研究と言えよう。

原則、今年度は月一回のペースで研究会を開催した。すでに前年度までに精査・読解していた五つの問答を、中間報告に向けて再検討を加えた。三十問の中、『摩訶止

観』の巧安止観の箇所において、痴迷と無明にはどのような違いがあるのかという問題を、広修も維綱もともに不二とする第二十六問答「痴迷と無明のこの二つは何れの殊あらんや」。五品弟子位は十信の前か、十信の第五心に相当するのかを別教と円教の解釈によって問答する第二十七問答「五品と十信の差別は同ぜず、諸々の忍位の号はまた異なる」。『摩訶止観』の破法遍に、初信に見惑を断じ、二信以降に思惑を断じると言うが、見思惑が無明というのであれば十信以降に断じることとの相違を述べる第二十八問答「見思は即ち無明とは、何が故に二信より已去は思を断ずと云うや」。『摩訶止観』に中道観を明かす中、一生のうち修行して悟る人とは龍女なのか、それとも他にいるのかという第二十九問答「初品より初住に至るまで、一生に修証すべきとは誰をかその人となすや」。『摩訶止観』観病患境に説かれる六気は、心を運び想を帯びて口より作られるのか、それとも一々の気が作られるのかという第三十問答「六の気は一一に気を作すや、それ如何」。以上の五つの問答である。

この最後の五つの問答は、天台大師智顛の『摩訶止観』から生じた疑問であることが見て取れる。ただし、比叡山からのそれぞれの疑問に対して、唐の回答が射っていないことがしばしば垣間見える。また、広修と維綱の決答の分量や内容を比較してみても、ますます差異が顕著になっているようである。

そして、以上の問答が、以降の日本天台の論議や口決に見られ影響を与えていることを鑑みると、「唐決」がいかに重要な典籍であったかを再確認するばかりである。また、これらの問答は現在でも結論が出ていない問題を含んでおり、当時の日本の学僧の学問的水準の高さには感嘆せざるを得ない。

今年度も、『大正大学綜合佛教研究所年報』第四〇号に、「唐決―「広修決答」と「維鑿決答」の比較研究（五）―」として前述の五つの問答を中間報告させていただいた。この第三期で、これらのテキストの読解が一旦完了する。天台を学ぶ研究員が減少したことで、今年度をもってこの研究会は一旦終了することになっている。まだ「唐決」は他に五種も残っており、「唐決」研究は中途半端であることは承知している。後継を育てることができないことは、研究会代表として忸怩たる思いであるが、またいつかこの研究が再開することを切に願うのみである。

仏教文化におけるメディア研究会

研究会代表 森 寛

本研究の目的は、人文科学的な精読分析によりメディアの表現を考察することで、時代や地域ごとに変遷し、異なる媒体を横断しながら多様化してきた仏教の宗教表象を明らかにすることにある。すなわち、人から人へ情報を伝える媒体表現・伝達手段の視点から、宗教者や知的エリートだけでなく、広く大衆に受容されてきた仏教文化の実態を浮き彫りにすることが、共同研究会が目指す統一課題となる。

主な考察対象であるメディアは、メディアウムの複数形となる語であり、媒体、媒質、伝達手段、中間と訳される。人間同士が知覚・感情・思考を伝達するコミュニケーションにおいて媒体となり、情報やデータを記録・伝達・保存するために用いられる音声や素材、身振り等といった物理的実体を指す概念である。また、近年の美術史学では、媒体という定義に注目し、伝達手段となり、表現形式に影響を及ぼす素材や技術をもこの用語が内包する問題として議論が交わされている。現代に至るまでの歴史を振り返れば明らかだが、仏教はメディアを積極的に活用することで、その教理を人々へ広め、東アジア圏を中心に各国で発展している。紀元前五世紀頃の古代インドで釈迦が総称し

た仏教の法理は、当初、人から人への直接的コミュニケーションにより継承されてきたが、その後、教説の忘失を防ぎ、教理としての体系化を図る目的から、経典、仏像、寺院、仏塔、石碑、音楽、儀礼といった、今日というメディアによる思想の探究と伝道が行われるようになる。仏教は、これらの媒介を利用することで、情報の保存と継承、文字を読めない者まで含めた大勢の人々に対する布教を推し進め、インド周辺から、東南アジア、中国、朝鮮半島、日本、欧米諸国にまで教線を拡大していく。

さらに世界各地へ伝播した仏教は、さまざまな共同体の政治体制、経済構造、社会階級、性別、異宗教、習慣、思想、価値観などといった異文化と接触し、時に対立や葛藤を生じさせながら融合していく。メディアは、宗教の枠組みを越えて、多様な文化的営みと混濁し、時代や地域ごとに変容するこうした仏教を文字、画像、映像、音響で表現してきた。そこで本研究会は、メディア表現を通じて認知される仏教に関連する諸相を比較文化学と表象文化論の学術分野から考察する。

現在、活動五年目を迎える仏教文化におけるメディア研究会では、共同研究の参加者各自が分担する論文の作成を行っている。しかしそれらを包括する総論をより具体的なものにする必要が出てきている。そこで現段階の構想としては、近現代におけるメディアが表現してきた仏教の宗教表象について研究を進めたいと考えている。

近代仏教研究においては、国民国家の成立や科学思想の流入といった背景の中で、大乘非仏説論などの近代的な問題の解決としての新しい仏教思想に着目されているが、同時に、現代の身近な仏教文化もまた近代以降につくられた新しいものとなる。明治政府の神仏分離令や欧化政策を契機として顕在化した日本仏教の近代化は、学術研究、教団改革、宗教者の社会实践といった側面だけに留まらず、美術・出版・映像といった分野に波及することで新たな仏教文化を生み出す契機となった。こうした近代以降の文化的うねりは、人間の創作表現と結びつき、メディアを通じて発信されてきたが、現代人の多くは、それらの多くが遠い昔から受け継がれてきたものと考えている。しかし、伝統的だと思われる仏教文化も実は、近代になってから人工的に創り出されたものであり、こうした事実を、エリック・ボブズボウムとテレンス・レンジャーの著書『創られた伝統』における指摘と重なる部分も大きい。経典や教義に関する研究や仏教史・仏教美術史の研究では扱われてこなかった、近代以降に出現した仏教文化の所産を考察する事で、創られた「仏教文化」という共通意識の一端を明らかにしたい。

中世東国仏教研究会

研究会代表 大八木 隆祥

当研究会は中世東国仏教の実態解明を目的に発足したものであり、現在は神奈川県立金沢文庫保管称名寺聖教の写本『仙芥集』（二三函一―一―三三）の翻刻を進めている。

『仙芥集』は鎌倉時代の真言僧である定仙（一二三三―一三〇二）の受法記録であるが、定仙の弟子の智照が定仙の受法記録をテーマごとに編集したものである可能性が、本号掲載分の二三函一―一―の奥書によって考えられるようになった。

当研究会は一昨年度までに二三函一―一―から九までの九冊の翻刻を終えており、作年度は二三函一―一―〇から一四までの五冊を翻刻した。これを『綜合佛敎研究所年報』第三十九号に掲載する予定であったが、諸事情により掲載には至らなかった。本年度は二三函一―一―五から二〇までの六冊を翻刻し、前号未掲載の一〇から一四の五冊分の翻刻と合わせ、今号に掲載することになった。

以下、翻刻分の概要を記すが、一〇から一四の分は前号の「研究会活動報告」に掲載済みであるので、本号では本年度翻刻分の一五から二〇についてのみ記す。

⑥ 二三函一―一五

後七日御修法についての口伝を記したものである。本冊は後七日御修法について醍醐と勸修寺の伝を記したものであるが、二丁表の識語には筆記年月日が記されているのみで誰の伝を記したものかは不明である。ただしこの識語の後は本文中に「了一上人云」「了一上人説」「了一上人云」といった記述が頻出し、了一上人公然の口伝を記したものであることが分かる。

⑦ 二三函一―一六

識語が無いため筆記に係る状況は不明。勸修寺流相伝の五秘密法次第について、同流の諸尊法集や他流の諸尊法集収載の五秘密法次第との比較・検討が行われている。本文中にも特に誰の伝かは記されていない。定仙自身が受法の次第について研究したものか。

ちなみに表紙外題下に「勸修寺／五之内」とあるように、本冊は勸修寺流諸尊法に関する五冊一具の内の一冊である。他の四冊については、一七「大元明王」、一八「求聞持法口傳」、一九「金剛夜叉／烏髻沙摩（以下略）」の三冊が該当するが、もう一冊は不明である。

⑧ 二三函一―一七

識語が無いため筆記に係る状況は不明。勸修寺流諸尊法について記した五冊の内の一つ。同流相伝の太元法についての口決が記されているが、欠損があり判読困難である。

本文中「私云」という記述が頻出するが、これが定仙の見解を記したもののか、『仙芥集』の編者である智照のものかは不明。なお「定仙云」という記述も一箇所ある。また、勸修寺流の太元法の口決ではあるが「太政法印云」として親玄の伝も記されている。

⑨ 一三函一—一八

勸修寺流諸尊法について記した五冊の内の一つで、同流相伝の求聞持法の口伝を記したものである。識語によれば正応二年（一二八九）十二月に願行上人憲静から受法したものである。願行上人は阿性上人覚宗から勸修寺流栄然方を相承しているため、本冊に記された口伝も勸修寺流栄然方のものであると考えられる。

⑩ 一三函一—一九

識語が無いため筆記に係る状況は不明である。勸修寺流諸尊法について記した五冊の内の一つ。同流相伝の金剛夜叉法・烏芻沙摩法・正観音法・七星如意輪法・不空羅索法・白衣法・二臂如意輪法・耶輸多羅法・准胝法についての口決が記されている。本文を見ても誰の伝を記したものか判然としないが、「私云」という記述が頻出する。定仙が受法した勸修寺流諸方の伝をまとめたものか。

⑪ 一三函一—二〇

勸修寺流の後七日御修法の記録についての口決を記したものの。巻中識語に「奉對了上人記之也」、奥書に「以上上人説記之了」とあることから了一上人公然の口伝を記したものである。

以上六冊をもって本年度を終えたが、来年度も継続して翻刻作業を進め、本年度と同等の分量を成果として発表することを目指したい。

仏教史料研究会

研究会代表 樺田 良道

本研究会は、歴史学の立場から古文書や古記録といった仏教関係史料を取り扱い研究を進めることを目的として、昨年度に立ち上げた。平成二八年度に真言宗豊山派金乗院（千葉県野田市清水）史料調査を実施し、内容の整理作業を進めている。金乗院は、応永五年（一三九八）の開基と伝えられ、近世期には本寺と檀林の寺格を有し、近隣寺院を統括していた。そうしたことから、同寺には、檀林・本末関係などを示す史料群が多く残されている。同寺の蔵には古典籍を含む史料が多く収蔵されているが、これら金乗院所蔵史料は市史や県史などにも収められておらず、未整理の状態である。昨年度は文書・記録類を中心に史料整理を進めると同時に、目録を作成した。目録中に立てた項目としては【主題】【文書種類（形態の別）】【年月日】【奥付内容】【備考】である。研究会参加者の分担作業として、作成作業を実施し、各担当からの作業の進捗状況の報告と、解読の難しい箇所などの読み合わせなどを行いながら、参加者全体の古文書解読の能力の向上を図っている。当初より、金乗院史料について着目していたのは、文政年間（一八一八～一八二九）の本山交衆に係る「大衆帳」と、近世中期に発生した近隣寺院との訴訟問題に関する古文

書・古記録類である。「交衆帳」の基本的な性格は論議が実施される度に作成された名簿である。そうしたことから、全体を一覧すると、法牘の浅い者が年を重ねる毎に上座へと昇って行き、やがては名簿上から名前を消していることがわかる。同様に、上座にいて名前が消えた者でも、一定の期間を経ると再び名前が記載されており、そうした内容から、金乗院を拠点として在地において活動した僧侶の様子を垣間見ることができるといえる。

また、訴訟問題については、内容そのものが現存する寺院との関係性に繋がりが得るものであることから、公表するか否かについては慎重な考慮が必要となろう。しかし、在地における本末関係の訴訟が、寺社奉行扱いとなり、裁許が下される一連の経緯については、仏教史以外にも幕府制度史面から見ても興味深い点である。

今年度は、予定していた残りの史料群（全体の1/3程度）の整理・撮影作業を実施したい。また、参加者全員が、本末関係、檀林制度、移転寺制度といった近世新義真言宗史の実態についての理解を深めておかなければならない必要性も実感した。次年度以降は、そうした知識の向上を図りながら研究会を進めていきたい。

「大学と宗教」研究会

研究会代表 松野 智章

本研究会は、「大学と宗教」を研究テーマとして掲げ、平成二二年四月に発足した研究会であり、今年度で第三期目を迎えている。第一期(平成二二～二四年度)の成果は『シリーズ大学と宗教Ⅰ 近代日本の大学と宗教』として、第二期(平成二五～二七年度)の成果は『シリーズ大学と宗教Ⅱ 戦時日本の大学と宗教』として報告してきた。

今年度から第三期がスタートした。今期においては昭和二二年から現在に至る戦後日本の大学制度(新制大学制度)上で展開してきた、宗教に関わる①学問、②養成、③資格に焦点を当てて調査研究を行っている。具体的な研究テーマとしては、下記の三つを設定した。

- ①学問…宗教関連学問の戦後史解明と現在の意義の探究
- ②養成…大学内宗教者養成の歴史的解明および現状に関する実態調査
- ③資格…大学を基盤に提供している宗教関連資格に関する調査研究

それぞれのテーマごとにグループを組織した上で共同研究を進めており、①②③での成果を有機的に接合しながら、最終的には大学制度上で宗教を扱うことの意義や課題、可能性について多角的に検討・探究していくことを目的とし

ている。

【①学問】

- ・小柳敦史…京都大学の基督教学講座における学問論と研究構想に関する調査研究
- ・柴田泰山…宗門大学における宗学の戦後史解明と現在の意義に関する哲学的探究
- ・三浦 周…大正大学における仏教学の戦後史の調査研究

- ・岡田正彦…天理大学における建学理念教育と天理教学に関する調査研究
- ・西谷幸介…キリスト教系大学における神学の戦後史解明と教理間対話の理論構築

- ・松野智章…日本の宗教哲学の戦後史と現在の意義の探究

【②養成】

- ・林淳…愛知学院大学・駒澤大学における僧侶養成の戦後史の調査研究
- ・安中尚史…立正大学における僧侶養成と日蓮系教団の戦後史の調査研究
- ・藤本頼生…國學院大学・皇學館大学と神職養成の戦後史の調査研究

- ・江島尚俊…同志社大学・関西学院大学・西南学院大学における聖職者養成の戦後史の調査研究

・武井順介・齋藤崇徳・宗教系大学八大学を対象とした
宗教者養成の現状と課題に関する実態調査

【③資格】

・高橋原・各大学における臨床宗教師資格の教育実態に
関する調査研究

・山梨有希子・宗教文化士制度の創設背景・歴史および
現状に関する調査研究

なお、本研究会が主体となつて平成二九年九月に開催された
日本宗教学会第七六回学術大会（東京大学）で MASUZAWA
Tomoko 氏をコメンテータに招聘し、英語特別セッション
「Reconsidering Religious Studies in Modern Japan in
Light of the Institutionalization of Universities」を実施
また、研究発表パネル「総力戦体制下の宗教系大学・専門
学校における「理念」の変質」を実施し、これまでの研究
成果を世に問うてきた。
今後、積極的に研究成果を報告していきたいと考えて
いる。

密教聖典研究会

研究会代表 駒井 信勝

当研究会は昨年度より、従来の「梵本写本不空羂索神変真言經研究会」と『理趣広經』の翻訳研究会」とが統合され、一つの研究会となった。そのため、『不空羂索神変真言經』と『理趣広經』の二本の經典を読み進めている。

まず前者の方は、『不空羂索神変真言經梵文写本影印版』を基礎資料とし、対応するチベット語訳および漢訳を適宜参照しながら精読している。これまでの研究成果は、『Transcribed Sanskrit Text of the Amoghapaśākalparāṇa (I)～(VII)』およびサンスクリット語校訂テキストの Preliminary Edition に試訳を加える形式で研究成果を報告した『Amoghapaśākalparāṇa: Preliminary Edition および和訳註(1)～(3)』として『大正大学綜合佛敎研究所年報』において報告している。

ところが、現在の方法では、全ての写本のテキストを報告し終わるまでに多くの年月がかかることが予想される。そのため、本年度からは、『大正大学綜合佛敎研究所年報』への報告を一度中断し、担当者たちが各自残りの写本をテキスト化する作業を進めている。未だどのような形になるかは定まっていないが、全てのテキストの内容を、より早く公開できるように準備をしている。

後者の方は、『理趣広經』の校訂テキスト作成とその読解を行っている。残念ながら本經のサンスクリット語原典は未だ発見されていないことから、校訂テキスト作成の際には、本經のチベット語訳および漢訳を中心に扱わざるをえない状況にある。しかし、『初会金剛頂經』を始めとする関連文献との比較を通じて、可能な限り原語を部分的に回収しながら作業を進めている。

現在は前編に相当する「般若分」(Sṛiparamādya-a-nāma-māyānakalparāṇa)を読み終え、後編に相当する「真言分」(Sṛiparamādya-mantrakalpakhandana)の読解を進めている。その中で、一部の先行研究において指摘されているように、プタク版の読みが他版と著しく異なっていることを確認した。プタク版の読みに関する問題は、今後の研究会においても取り上げていき、『理趣広經』全体を通じた視点でプタク版をどのように扱うべきかを検討していく所存である。

また、「般若分」を一通り読み終えたため、次年度からは「般若分」の出版に向けた準備を進めていこうと考えている。

なお、本年度の『綜合佛敎研究所年報』には、『理趣広經』第十二章・第十三章・第十四章のチベット語訳校訂テキストを報告する。

今後両經の全容解明を目指して文献学的研究を継続し、その成果を報告していく所存である。

梵語仏典研究会

研究会代表 横山 裕明

本研究会は、大正大学の伝統的な梵語仏典研究を受け継ぐ研究会として、平成二十八年より従来の「声聞地研究会」「律経研究会」「サンスクリット修辭法研究会」という三つの研究会を一つに統合して始動した。これら三つの研究会の実体は研究グループとして保持しつつ、グループ間の行き来を自由にして研究者の活動の幅を広げることで伝統的学問の継承とさらなる発展を目指して研究活動に取り組んでいる。本研究会としては、二年目であり、各研究グループは引き続きの内容として次の研究活動を行った。

まず声聞地グループ(昭和五十四年度より共同研究を開始)は、第一瑜伽処から第四瑜伽処までの全四章からなる『瑜伽論声聞地』の校訂テキストと訳註を作成している。平成二十五年度より「第三瑜伽処」の訳註を進めており、本年度内の出版を予定している。本年度は校訂テキストおよび訳註を見直して細かいミスを取り除く作業に従事し、さらに「はじめに」および「概要」といった書籍化するに当たって必要な部分の執筆に取り組んだ。現在は最終稿を出版社に提出した段階であり、本年度内の出版は確実となっている。なお、出版後は「第四瑜伽処」を読解していく予定であるが、「第三瑜伽処」に関する海外の専門家たちの評

価やその他の出版情報に基づいて今後取り組むべき箇所を柔軟に選定していく予定である。

次に律経グループ(平成十四年度より共同研究を開始)は、平成十三年に出版された『チベット・ウメ字転写梵文写本集成影印版』に含まれる『律経』および『律経自註』『出家事』の訳註を進めている。本年度は、昨年度までに投稿した『律経の研究(10)』の続き(B. V. Bapat & V. V. Gokhale 校訂本 §292 に相当)を訳註した。参加メンバーが声聞地グループとほぼ同じであることから「第三瑜伽処」の出版に注力せざるを得ず、思うように訳註を進めることができなかったが、§170までの校訂テキストと訳註を完成させている。次年度は四川大学の Luo Hong 教授たちと共同で、第二回『律経』ワークショップの開催を予定している。

最後に修辭法グループ(平成十九年度より共同研究を開始)は、全五章からなるヴァーマナ(Vamana)著『詩の修辭法の手引・註(Kavyala Karastuvethi)』のローマナイズと訳註を平成二十四年度より順次、当研究年報に発表している。本年度は第四章の見直しを行ない、その成果として『綜佛年報』に第四章全体のローマナイズと訳註の掲載を予定している。次年度は引き続き第五章に取り組み予定である。なお、第五章を正確に訳註するにはパーニニ文法の知識も要するため、その準備作業としてパーニニ文法に関する先行研究も併読している。サンスクリット修辭学に関する研究は、サンスクリット文献の厳密な解釈ならびに翻

訳法の確立にも役立つことがこの一〇年間の共同研究から判明しているので、インド・アールヤ語の原典を扱う幅広い分野の研究者に積極的な参加を呼びかけるものである。

唐中期仏教思想研究会

研究会代表 小林 順彦

この研究会は、唐中期の帝都長安における仏教がどのようなものであったかを研究テーマにしている。第一期としては、飛錫が著した『念仏三昧寶王論』を中心に考察し、一定の成果を刊行した。その際に不十分、もしくは疑問に思われた点を解決すべく、第二期として研究活動を継続しているのが本研究会である。

唐中期は仏教が中国において華開いたと言われるように、諸宗融合が図られた時代でもある。それは換言すれば、人々の往来が最も盛んになった時代であるとも言えよう。実はこのことが、唐中期仏教全体の把握を更に難しくしているのである。そこでこの研究会では、まずその素地を抜本的に見直していくことから始めた。

我々の研究は、先学の研究があつてそれを土台にして構築していくのが常である。したがつて先学が参考にした書物や引用箇所は、大いに参考になるところである。しかし裏を返せば、それらを孫引きして満足し、それ以上の探索はしていないというのが現状であろう。

さて、かかる状況でまず手を付けたのが、仏教関係以外の漢籍を調査することであつた。そこで唐代の様子を探る上で、『全唐文』の調査を行うこととした。周知の如く『全

唐文』はかなりの分量があり、それを最初から読み進めていくのは難作業であつた。各自分担する巻数を決め、唐中期の文献を抽出し、カード化することにした。

長安城の白地図を作成し、カード化が終了した段階で地図に書き入れ、人物の動きを可視化することによって、人物の往来を把握しようとしたのであるが、カード化には思いもかけず時間がかかつてしまった。その要因には次の理由が挙げられる。

- ①『全唐文』自体の読解がかなり難解であり、その中から必要案件だけ抽出するのが難しかったこと。
- ②かなりの分量があるため、作業をしていくうちに収集にバラツキが出てしまったこと。

- ③作業を進めていくうちに、当初のフォーマットで対応できなくなつてしまったこと。

主に以上のような理由で、作業は遅々として進まず、徒に時間だけが過ぎてしまった。加えて、研究員達が皆な大学非常勤講師になつてしまい、研究会開催曜日に参集出来なくなつてしまったことが痛手であつた。

今年度が一応研究会としての最終年度であつたわけだが、『全唐文』を題材として採用したことは間違ひではなかった。ただ余りにも大きな森に手を付けてしまったため、成果として世に出せなかつたのは残念至極である。カード化は終わつて整理をする段階まではこぎ着けた。この間の

努力を無にするわけにはいかないので、いつか再度着手して形に出来ればと考えている。

何れにしろ、永年に亘り面倒を見ていただいた諸先生方や、歴代総仏事務局の方々には物心共に非常に御世話になりました。期待に応えられなかったことを陳謝すると共に、厚く御礼申し上げます。

室町期における諸宗兼学仏教の研究

研究会代表 大橋 雄人

本研究会では、室町期の仏教研究において従来あまり注目されていない諸宗兼学・融合思想を有した仏教者旭蓮社澄円（一二九〇—一三七二）の思想研究を行っている。

澄円は、八宗の教義に通じ、入元して廬山東林寺に登り、白蓮宗の優曇普度に慧遠流の浄土教を学んだ人物である。澄円は横尾山で三部の密灌を受け、南都で登壇受戒し、天台の承遍（檀那院流）・観蒙から天台教を学び、浄土教は九品寺流、鎮西流の相伝を受け、禅宗では虎関師錬との交流が確認でき、諸宗の教義を遍学していたことが知られる。また、南朝の後村上天皇の帰依を蒙り、南朝の為に奔走している。それ故、中国元代仏教の日本への影響や皇室と仏教者との関係等、南北朝期の仏教に関する新しい研究が進むことが期待されるテーマでもある。

具体的には、これまで一度も活字化されていない貴重書である澄円『浄土十勝論』『同輔助義』の書誌的整理をはじめ、著者澄円伝の研究、『浄土十勝論』『同輔助義』の翻刻・書き下し文・語注の作成を行っている。澄円『浄土十勝論』『同輔助義』に関する先行研究は非常に少なく、思想史研究、書誌学研究、伝記研究のどの分野においても、これまでほとんど行われてきていない。そのため、本研究会参加者各

位がそれぞれの問題意識のもと個別に研究を進めている。翻刻・書き下し文・語注作成作業の進捗状況については、昨年度までに第二巻（巻上乾中）二〇丁オまでを終え、本年度は昨年度の続きより開始し、第二巻（巻上乾中）四六丁オまでの作業を終えた。詳細については本誌掲載の中間報告をご覧いただきたい。

残念ながら、本年度は本研究会のテーマに関する個人研究発表を行うことができなかった。

次年度の共同研究は、第二巻（巻上乾中）四六丁オより作業を引き続き進め、個人研究についても精力的に口頭発表や研究論文の発表を行っていきたくと考えている。これまでにやってきた翻刻等のデータを再整理し、出版に向けた作業を順次進めていきたい。

〈参加メンバー〉

代表者	大橋 雄人
参加者	吉水 岳彦 郡嶋 昭示 倉奈田智宏
	工藤 量導 岩津 英資 杉山 裕俊
	長尾 隆寛 安孫子稔章 勝崎 裕之
	後藤 史孝 前島 信也 春本 龍彬
	星 俊明 青木 篤史 長尾 光恵